

千葉に建築を訪ねる

九、ユーカリが丘の

セミナーハウス

建築家・新建代表幹事

三沢 浩

これまでの建築訪問記はすべて自ら選択したものであり、だからこそやや独白めいた訪問記であった。ところがこの回からは、特に千葉支部からの要望を加えて、千葉市及び周辺にある建築を選択し、同行して視察したものをとりあげようとしている。視察の時期である、二〇〇〇年九月末から八か月余を経ている、これが目に留まる時には状況が変わっているのではないかと考えられる。二年間の連載になるからである。加えて幾人もの方々と同行しているから、その時の気象や時刻については嘘は書けない。ありのままの本音が、どのように記述できるのか心許ない。

当時の最終コースが、佐倉市ユーカリが丘の「和洋女子大学佐倉セミナーハウス」であった。かねて京成線で通ったことあり、また地図の上で確かめて、このおもしろいような電車が廻る中学校駅、女子大駅、公園駅に何があるのだろうか気になっていた。新興住宅地の開発に、モノレールを一巡させる企て以上に、この大学の存在理由が知りたかったのである。ところがそれが「和洋女子大学」であり、ナンシー・フィンレイ設計の「セミナーハウス」であると知って、心が穏やかではなくなってきた。その上、何となく雑誌で垣間見ってしまったから堪らない。実体をこの眼で確かめたくなった。だからこそ、この建築を千葉支部建築視察に加えたのである。

まずは要点からいこう。この土地全体の開発は民間の「山万株式会社」によるもので、すでに二〇年が経つらしい。「ユーカリが丘ニュータウン」は、一九九九年

の日本都市計画学会賞を受け、ユーカリが丘自治会協議会代表と、デベロッパー山万代表連名の受賞となっている。二〇〇〇年四月に四四〇〇世帯、人口は一三八〇〇人を数え、増加傾向にあった。「和洋女子大学」側は誘致にあたって、このタウン最大の八三〇〇〇㎡を得て、そこに四％にあたる三五〇〇㎡の建坪で、延四五〇〇㎡のRC造と鉄骨造の建物をつくったのである。設計者は前記のフィンレイに加え、東大の千葉学、協力設計者に愛和設計研究所と磊阿設計とある。

この広大な敷地は駅前であり、ここに来て初めて見た数十本のユーカリ林に導かれる。陸橋を渡ってRC造二階建の研修棟と食堂、鉄骨造二階建のうねる宿泊棟からなる。背後に浴室棟を従え、残った広大な土地はすべて洋芝で覆われる。「建設残土を敷地外に出さぬよう、切土盛土を±にして人工の地形を実現させる」と設計者が記述しているが、ゆるやかに盛り上がる野原が、背後の丘の前まで広がり、恐らくはあのような丘があったのだということを感じさせる。二棟の間にこの土地には珍しい人工池あり、常に強制循環させられた濾過装置付きの水面が、宿泊棟の外部廊下いっばいに構成されている。この水面、最近殊に流行し、谷口吉生、安藤忠雄らの常套手段となってきた。本来の水面は、反射の意味をもつリフレクション効果として、サリネン辺りから始まったのだが、病が高じて今では反射以上に、自らの建物の相乗効果を狙うために使われるようになった。

それだけではない。安忠の詭弁もときによれば水と土



は環境の一部、それを大切に扱うのがエコロジー建築だとされる。とすれば土をどけて別の場所に山をつくり、水を入れて循環させることは、エコロジーに反することになる。不自然を自然にする原理を環境の創作とすると、われわれは地球にしばをすることになってしまつたのではあるまいか。この「セミナーハウス」が若い学徒に泣けるほどの郷愁や、ロマンチズムを帰る時の土産代りに与えているとすると、この研修センターは緑の芝生と盛られた石積みと、豊かに流れる水面の演出によって、不自然を売り物にしている。同じように自然を本当に建築と同調させるならば、遠くに見える丘の自然の中にこれらの宿泊所があり、建物が自然の緑そのものに抱かれてあるべきなのである。もっともユーカリの木自体を、開発の目玉にしたこのユーカリが丘という名称すら、すでに虚であり、関係者の誘致に乗った、学内施設課の基本構想そのものに、見当違いがあつたかもしれない。だから建築家はその才能をメフィストの手に委ねたのである。止むを得なかつたのかも知れない。

ただ恐るべきは「緑の丘」などの草むしりを研修の一つに加え、使用者をも巻き込んで生き存えていく施設」とある設計者の言葉は、まさに自ら造物主となり、芝生の中の雑草取りという最も困難な仕事を、利用者共存にすり替えている姿勢が見られる。だからそこに思い上がって自然共生を唱えている、今の時代の建築家に共通な心理を感じていた。

建物自体の方にも、いくつかの間違いがある。パソコ

ンを使うと出来てしまつ、円形の乱用がそれである。繰り返しのプランはそれを思わせる。また軽い細い円柱の繰り返しと多用、それを支える薄い屋根にも傾向がある。これらの軽さと軽薄さを、私は「(軽キテクチャー)」と呼ぶことにしているが、この宿泊棟の軽さは一見スマートでありながら、建築の質の深さを示さず思想の軽さを示しているように思えるのである。反面、『学会作品選集』で大野秀敏が選評しているように、研修棟ロビーと食堂の二つの大空間は「平面形状を変えているものの、共に壁面が全面ガラスであるせいか似た印象、どちらかはもう少し閉鎖的でもよかった」。

それ以上に、ガラス張りの開放性は落ち着ける場所をなくし、音を割れをつくって、会話も思うようにならなかつた。食堂は人が大勢入れれば救われようが、全員泊まつても二二〇人と一〇人の職員だから、吸音にはなるまい。贅沢な施設であり、恐らくは利用頻度も高いと思われるが、形体のロマン스에追いつくだけの哲学的、精神的居住性に欠けると考えた。長期間の逗留には耐えられないと見たのは僻目だろうか。一応は利用した女子学生にも聞いてみたが、夜間の宿泊の際に暗さを感じていることが分つた。またオープンな廊下を浴室まで歩いていくのは、開放感があつてもプライバシーは少ない。従つて浴室に入つても女子学生たちが、完全に安心していられるという保証がない。事実、浴室の外に石垣を巡らせていても、石垣の外までは誰でも近付けることも指摘されていた。今後の問題は、この安全性の確保にある。(続)